

若手教員と語る学校のリアル 2022

金田 慎吾（埼玉県立三郷北高等学校）

秋本 栞利（安田学園中学校高等学校）

山下 達也（明治大学文学部）

はじめに

本分科会は、現職教員のみならず、教職課程を履修中の大学生がさまざまな「学校のリアル」に触れ、教職についての自らの考えを深める機会とすることを目的に設置された。今回は、中学校・高校に着任して3年以内の「若手教員」2名をお迎えし、日々の教育活動（授業、生徒指導、部活、保護者や同僚教員たちとの関わり、直面している課題等）を紹介していただくとともに、教員という職業についての自身の考えについても語っていただいた。

登壇者のおひとは、COVID-19の感染拡大の影響を受け、学校がこれまで経験したことのない「非常事態」の最中に私立中高の教員として教職生活をスタートさせた方であり、おひとは、大学院への進学を経て2022年度から公立高校教員として教壇に立つ方である。

近年、学校教育界では、COVID-19感染拡大への対応だけでなく、教員の「働き方改革」や免許更新制の廃止、新たな学習指導要領への対応などが注目されているが、そのような中で現場の若手教員たちは学校という場でどのような経験をし、何を感じているのか、そのリアルな姿に迫った。当日は会場での対面参加者とオンラインでの参加者がおり、分科会の後半には参加者を交えた質疑応答・情報交換が行われ、双方にとって有意義な機会となったのではないだろうか。

以下、当日の発表内容をもとに登壇者のお二人に執筆していただいたものを掲載する。

（山下達也）

今の時代を生きる教員へ

金田 慎吾（埼玉県立三郷北高等学校）

はじめに

私は、埼玉県の公立高校（偏差値45程度）に勤める1年目の英語教員である。今回、若手教員パネラーとして登壇させていただいた。主に、今の時代に教員になろうとしている学生に向け、少しでもこの仕事のリアルさが伝われば良いという思いを込めて執筆した。本稿では、登壇時に発表した内容を多少深めつつ整理することにする。

現任校の現状

私が勤務する埼玉県立三郷北高等学校は、三郷市に位置する普通科の高校である。全校生

徒の約 700 名に対し、教職員数は 50 名程度である。埼玉県の高東に位置するため、地元の生徒が 8～9 割を占める。同様の理由からか、生徒募集に力を入れないと 1.0 倍を切ることもある。いわゆる「進路多様校」と呼ばれ、四年制大学、専門、短大、就職と、生徒は様々な進路選択をする。その分、教員の負担も大きい気がするが、一般受験をする生徒はほとんどいないため、受験指導は主に面接や小論文対策である。部活動が活発で看板ではあるが、昨今の働き方改革の流れもあり、一部の部活を除き縮小傾向にあると感じる。

教科指導の実際(英語)

まず、私は英語の有用さ、楽しさを生徒に伝えるために教鞭をとったことを述べておく。また、同様の理由から教科の専門性を高めるために大学院への進学も決めた。しかしながら、現任校には英語を学ぶモチベーションを持って入学してくる生徒はほとんどいない。そのため、私の個人的な教科指導の目標は

- ・生徒の英語に対する抵抗感を無くす

そのための手段として、

- ・生徒が英語を使う（特にアウトプットの）機会を増大する
- ・専門的な知識を有し、それを子どもが分かる言葉で説明する
- ・生徒にとって「わかる授業」なのか、毎学期アンケートを取り、改善するようにしている。

その結果、2 学期の授業アンケートでは 95% の生徒が「分かりやすい」「楽しい」と回答してくれた。初任者の私がここまで授業に拘る一番の理由は、【授業の評価＝生徒の評価＝保護者の評価＝学校の評価】とつながっていくと信じているからだ。部活動で学校の評価をあげていくのも一つだろうが、それは一握りである。しかし、授業は教員であれば誰もがするものであり、自分の専門性を通じて生徒とコミュニケーションを取れる場所である。そのため、これから教員を目指す学生さんには、是非「教科の専門性」を磨いて準備してほしいと感じている。

部活動の実際

これから教員になる方なら、「部活」のリアルには興味があるのではないかと。私は現在、男女バドミントン部の主顧問として指導にあっている。初めてそれを知らされたとき（2 月中旬だった気がします）は正直驚いた。「主顧問って初任者がやっていいのか？」という意味の驚きである。しかし実際やってみると、生徒も保護者も私のことを【バドミントン部の顧問】として見ており、【4 月に社会人になったばかりの人】としては当然見てくれないのである。そのため、練習試合の日程調整、生徒の大会登録、部費の管理、部活動ホームページの更新などなど、様々な仕事が当たり前のように降りかかってくる。その意味で、肉体的、精神的負担は大きい。

昨今の流れで、部活動は縮小傾向にあると先述したが、実際の現場では「部活に力を入れる教員は良い教員」感が流れており、各教員が運動部をもつことはほぼ必須の状況である。

私は中高を野球部で過ごしており、週6～7で部活動をしていた。その身分で言えたことではないが、部活動は段々と地域移行していかないと教員の負担は大きいままになってしまう気がしている。

ICT普及の実際

私が初任者として半年程度働いてみてもっとも感じたことは、ICTを活用する発想が浸透していないことである。例えば、学生のみなさんならこのケースにどう対処するだろうか。

- ・コロナで学級閉鎖が出た。生徒は1週間自宅待機になるが、その期間もオンラインを使用した授業をするかそれに代替する課題を出すように。

おそらく、多くの方が「授業スライドを作成し、zoom等の画面共有を活用して双方向型の授業をする」ことを考えつくのではないかと感じる。しかしそれは、我々がコロナ禍でそのような措置を受けてきたor実施してきたからであり、ほとんどの学校(中高)の先生はそのやり方を知らないのである。

話を戻すが、他の場面でもICTを活用すればもっと簡単にできるのでは?と感じる場面は少なくない。そして、たいいていの場合その感覚は合っている。そのため、これから教鞭をとるみなさんには、是非ICT関連には精通してほしい。私も、現任校に来てから「これ(特にexcel)を学生の時勉強しておけばよかった」と思う場面が多くある。ICTに精通していることは、自分の業務も、学校全体の業務も減らすことにつながると考えている。

おわりに

今回この分科会に登壇して、様々な現場の先生や学生と交流して、私の方が多くのことを勉強させていただいた。生徒のために熱意を持ち、同時に教員にとっても働きやすい環境を目指している教員は意外と多い。そして何より、生徒の成長を間近で見られるこの職業は、私が学生のときに憧れていたそれと完全に一致する。是非、これから先生になる方には希望と、これからの学校を自分たちで変えていく意識をもって準備をしてほしい。私自身も、経験をどれだけ積んでも初心を忘れずに生徒と向き合いたいと感じた分科会であった。このような機会をいただいた明治大学に今一度感謝し、結びとする。

業務の幅が広いことは負担? やりがい?

秋本 栞利 (安田学園中学校高等学校)

I はじめに

卒業式のない卒業なんて社会人になれないよ、なんて言いながら大学を卒業したことをつい昨日のように思っていたが、気づけば教員生活も3年目。学生時代に教育会に参加した際には、漠然としたイメージだった「教職」について、年齢の近い現職教員から温度感をもって伝わってきた言葉が妙にリアルだったことをよく覚えている。せつかく発表する機会をいただけるなら、学生に向けて何か参考なるかもしれないことを話したいと思った。そこで、私がどのようなことを経験してどのようなことを感じたのかや、教職に就くにあたって学生のうちに知っておきたかったと自分自身が思っていたことなどを話すことにした。

Ⅱ 私の3年間

私は、大学卒業後の4月から現在まで、安田学園中学校高等学校で勤務している。校務分掌は、1年目は中学1年生の副担任と式典時の放送係、2年目は中学1年生の担任、3年目は高校1年生の担任で、これらに加えてバドミントンクラブの顧問を3年間務めている。

1年目は、授業中心の1年間だった。経験も無ければ授業のストックも無いため、朝から晩まで、学校でも家でも通勤電車の中でも授業のことばかり考える生活を送っており、ワークライフバランスは全くとれていなかった。一方で、授業内外で生徒と関わるなかで、生徒との接し方や距離感について考えるようになり、「生徒と同じ目線にたつことができる教員」が理想の教員像だと考えるようになった。そうして、「教員と生徒」という関係でありつつも「人と人」として接することを意識するようになった。

2年目は、担任になったことで業務量と責任感がとても増えたことを実感した1年間だった。例えば、クラスの生徒に対して生活面と学習面の管理・声かけ・指導、それらを学年団や授業担当の教員間で共有・相談、必要に応じて保護者へ連絡、あるいは保護者からの連絡に対応、出欠の記録や成績の処理などがある。授業準備が中心だった私の1日は一変し、様々な業務を要領良くこなす必要性を強く感じた。一方で、時間と手間をかけて向き合ってきた分、クラスへの愛着は月日が経つごとに強くなっていった。生徒たちの成長に感動し、自分の声かけや悩んだ時間が報われたとすら思った。

3年目の現在は、指導要領の改訂にともなう新設科目である地理総合の授業作りに注力している。現状、クラス運営は安定しているが、担任業務と授業準備の並行はもちろん、慣れない進路指導もあり、なかなか気が休まらない。

このように年々業務量が増えるなかで、完璧を追求することは素晴らしいことだが、それでは教員は務まらないと感じている。「手を抜く」と言うと聞こえが悪いかもしれないが、力を入れるべきこと・時間をかけるべきことは何かを見極めて、また、そのように自分が思うことは何かを考えて業務にあたらなると時間は絶対に足りなくなるだろう。

Ⅲ 教員って何をやる仕事？

教員という職業について、誰しも生徒目線でよく知っている。仕事内容は授業をすることや部活動の指導をすること。その通りなのだが、そんなに単純ではない。50分間の授業をするためには、その何倍もの時間をかけて授業準備をする。それには資料集めやプリント作

成だけでなく、担当教員間で授業進度や扱う内容を合わせるためのコミュニケーションを取っておくことも含まれる。部活動の指導をするなら、練習の方針や計画を事前に立てておく必要があり、練習中の安全管理も欠かせない。その練習も生徒はさも当然のように土日も行っているわけだが、それは顧問の休日出勤により成り立っている。

これらに加えて、働き始めてから、これも教員がやっていたのかと気づいた業務が少なくなかった。生徒の学校生活に直接関わるものとしては、例えば、行事における計画立案や施設予約、予算管理などがある。また、直接関わりのないものとしては、例えば、学校説明会の受付や案内、入試問題の作成や入試当日の試験監督・採点などがある。

このように教員の業務内容は多岐にわたる。「教育現場はブラックだ」とよく言われるが、実際に働いてみて、業務の幅が広いことが負担になっているのだと実感している。では、ブラックな仕事だから就かない方がよいのか、それは考え次第だろう。

社会経験のない私が一般企業を引き合いに出すのは少々おこがましいが、教員という仕事は特異なものだ。まず、研修期間もなく初日から一人の「先生」として扱われる。また、職場内の人間関係の多くは「上司と部下」ではなく「先輩と後輩」である。ネガティブに捉えるなら、経験がないまま現場に放り出される不安があるだろう。しかし、ポジティブに捉えるなら、若手でも自分の意見を言うことができ、基本的には自分のやりたいようにやらせてもらえる仕事だと言えるだろう。

つまり、この特異さをどのように感じるか、業務にともなう責任を負担と思うかやりがいと思うかなのではないだろうか。もちろん学校や職員室の雰囲気次第で働きやすさは大きく変化する。私自身は、地理を専門とする教員として、1年目から授業方針や教材選定などの面で好きなようにやらせていただけており、それはとても有難いことだと感じている。

IV おわりに

この2年半、私は目の前の業務をとにかく、とにかくこなす日々を過ごしてきた。自分自身の将来を見据えて何かできたわけでもなく、振り返って何か考えたわけでもなくである。しかし、今回の発表に向けての準備がこれまでの教員生活を振り返る機会となり、教員としてまだまだ未熟ではあるが、できることも分かることも確実に増えていると気づいた。発表の最後にも述べたことであるが、頼りになる先輩方、懐いてくれた可愛い生徒たち、そして、授業が思い通りに盛り上がった時の達成感に支えられて今日まで来た。コロナ禍に入社し、休校により2か月遅れで始まった教員生活は不安しかなかったが、今日までどうにかやってこられたことに感謝し、明日からまた頑張っていきたい。

最後に、今回の教育会はオンライン参加が基本とのことで、参加者、特に学生の反応を見ながら発表を進めることはできなかった。しかし、オンラインだからこそ気軽に聞いてもらえていたら、私の経験が少しでも参考になっていたら嬉しく思う。なにより、在学中にお世話になった山下先生の前で、このような発表ができたことを嬉しく思う。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。